

ナチュラルキス 4

S a b o k o e s K e i s b i

風

fuu

termity



エタニティ文庫

目次

ナチュラルキス 4

一生の宝物

299

5

ナチュラルキス4

1 ドキドキに肩透かし

「どうしたのよ？」

居間に立ち尽くし、そわそわと右に左に身体を捻^{ひね}っていた榎原沙帆子は、母である美美子の声に、ぴたりと動きを止めた。

母の隣に座っている父の幸弘までもが、彼女のことをじっと見つめているのに気づいて、沙帆子の頬は自然と赤らんだ。

「な、何？」

「何って、こっちが聞いているのよ」

「な、何を？」

戸惑った顔で問いに問いを返した娘に、美美子はお手上げというように、夫に両手を上げて見せた。

「色々あるんだろ」

「何が？ わかって言ってるの、幸弘さんってば」

くすくすと美美子が笑う。

幸弘は、愉快そうな妻の笑いに、なんとも捉^{とら}えどころのない笑みで応える。

「それで？　なんで、立ったまま挙動不審にきよぼきよぼしてんのよ？」

きよ、挙動不審？　きよぼきよぼ？

そんな風に見えたのか？

沙帆子はうろたえ気味に母を見た。母の口元には、明らかに浮かんでいる。いまの問いは、娘をからかうためのもので、彼女がなぜ落ち着かぬ気分なのか、この母はすでに察しているのだ。

「べ、別に、わたしは……」

「別に、なあに？」

沙帆子は、母の愉快そうな表情を見て、口を閉じた。

「な、なんでもないもん！」

沙帆子は叫ぶように言い、ぷりぷりしつつ居間を出た。

ドアを閉めた途端、母の楽しい笑い声が聞こえ、ムカツキが増す。

「まったく……」

自分の部屋に入った沙帆子は、怒^{いか}りのこもった足取りでベッドに歩み寄り、勢いよく座り込んだ。

いま、我が家のお風呂に入っているのは、彼女の副担任の佐原啓史^{さばらけし}。なんとも信じられないことに、数日後に沙帆子が結婚する相手なのだ。

今夜、佐原はうちに泊まることになっていて、いま、お風呂に入っている。考えまいとしても、頭には、ちらちらと風呂上がりの佐原が浮かんでしまっただけ……

お泊りに行ったときに、髪をぬらし、パジャマをセクシーにはだけさせた佐原にどれだけドキドキさせられたか……

いまも佐原にはドキドキさせられっぱなしだし……

こんなので、ほんとに結婚なんてできるんだろうか？

今夜佐原が彼女の家に泊まることになったのは、母の計らいだった。結婚することで、沙帆子の生活は一変することになる。これまで両親に学費を出してもらったことも、お小遣いをももらうことも当たり前だと彼女は思っていた。だけど、結婚したら、両親に払ってもらったのも、佐原に払ってもらったのもおかしい気がして……ものすごく心が不安定になってしまったのだ。

そんな娘の心情に母は気づき、今夜、佐原とじっくり語り合う時間を作ってくれた。おかげで、ちゃんといまの自分の気持ちを佐原に伝えることができて……怒られてかなり恐かったりもしたけど……ずっと心に巣食っていた不安は消えた。それにしても、佐原先生……今夜、どこで寝るのかな？

居間？ それともわたしのベッドの横に、お布団を敷くのかな？

だが、母は居間でくつろいだまま、いまだに布団の準備をしない。いったいどうするのか、母に尋ねてみたいのだが、どうしても口に出して聞けず、ちっとも落ち着かない。

沙帆子は床をじっと見つめた。

先生、髪を洗うかな？

前髪に少しずつがついてたりしたら、心臓がキューンと縮んで、そのまま止まっちゃいそう……

沙帆子の脳裏に、ふいに上半身裸の佐原が浮かび上がった。

うわお、ダメダメダメ！

半裸の佐原を頭から追い出そうと、沙帆子は躍起^{やつき}になって頭をぼかばか叩いた。

叩きすぎて頭がジンジンする。彼女はいくぶん惨めな気分になりながら、ベッドにひっくり返ってため息をついた。

何やってんだ……わたし……

沙帆子は身体の力を抜き、ベッドのスプリングを全身に感じながら天井を見つめた。

「沙帆子」

ノックの音と同時に母の声が聞こえ、沙帆子は慌てて起き上がった。

「な、何、ママ？」

「啓史君、お風呂上がったわよ。入ったら」
「あ……う、うん」

沙帆子は急いで立ち上がり、クローゼットを開けた。佐原のところにはとんどの服を運び込んでしまったために、この部屋と同じで空間ばかりが目立つ。沙帆子は、空間から目を逸らし、着替えのパジャマに手を伸ばした。

やはり、今夜はこのパジャマを着るしかないのか？

以前佐原にお披露目したイチゴ柄のパジャマは、間の悪いことに洗濯に出してしまっている。昨夜着て寝たイチゴ柄のパジャマを、今朝、洗濯カゴに入れるのを忘れてしまったのだ。

朝、カゴに入れておけば、今日のうちに洗ってもらえたのに……

この真っ赤なリング柄のパジャマは、あのイチゴ柄より子どもっぽい。もっと古いのならまだあるが、それも似たり寄つたりのお子ちゃま柄だし、それらを着るくらいなら、まだこのリングのパジャマのほうがよさそうだ。

ラフな普段着を着てもいいのだが、佐原がいるからいつもと違うことをするのって……逆に勇気がいるというか……

沙帆子はため息をついた。

クローゼットの中を改めて見回した彼女は、あるものに視線を止めた。

母がお泊りのときに持たせた、エロっちいネグリジェ……引越しの荷物に詰められなくて、ここにあるわけ……

沙帆子はブンブン首を振った。もちろんこんなの、論外だし。

またノックの音がした。

せ、先生？

「開けていいか？」

「は、はい、ど、ど、どうぞ。ですっ」

慌てふためいた沙帆子は、ボックスから闇雲に下着を掴み出し、パジャマの中に丸め込んだ。

「早く、風呂に行つてこい」

ドア口に現れた佐原が命じるように言う。

「は、はい。行きます。す、すぐ」

佐原に目を向けず、沙帆子は急いで振り返った。だが、手にしているパジャマのことを思い出した彼女は、焦りまくってそれを後ろ手に隠し、それからやっと佐原に顔を向けた。

うっ、おっ！

先生、か、髪洗ってるし……

し、しずくが……しずくが……前髪についてたり……す、するし……

風呂上がりでセクシーすぎる佐原がすっと歩み寄ってくる。沙帆子はドギマギして彼を待ち受けたが、佐原は腰を^{かが}屈め、床に手を伸ばした。佐原が掴もうとしているものを目にして、沙帆子は目を^む剥いた。

パ、パンティだ！

知らぬ間に床に落としたらしい。丸まっているので、まさかそれがパンティだとは、佐原は気づいていないに違いない。

「そ、それは、ダ、ダ、ダメッ！」

沙帆子はバツと屈み、手にしたパジャマでパンティを押さえ込んだ。

「リングか……」

「は、はい」

佐原の言葉に対して、なんでか床に正座し、お辞儀しながら返事をしている自分がいた。わたしってば、馬鹿みたい……

火を噴きそうなほど顔が熱かった。

真っ赤になった沙帆子は、パンティをパジャマに巻き込んで拾おうと苦心した。

「真っ赤だな」

からかいのない静かな声で、佐原が言った。そして沙帆子の前にしゃがみ込んできた。

「は、はい。パジャマ……こ、こんなのしかなくて……」

彼女は^{しお}萎れて答えた。

佐原が小さく吹き出した気がして、沙帆子はちょっとだけ視線を上げた。

目の前に、シックな黒いパジャマを着て床に片膝についている佐原の顔があった。

あまりに至近距離で、トクトクと鼓動が速まる。

佐原の手がすっと伸びてきた。

彼の長い指の先が、彼女の前髪をそっと揺らし、沙帆子は身体の芯がぞくりと震えた。

佐原の眼差しは、何か言いたげに沙帆子を見つめてくる。その眼差しの強さに、心臓が派手に暴れ始めた。

「ほら、風呂入れ」

彼女の頭のとっぺんをぽんと叩いて佐原は言う、沙帆子のドキドキに肩透かしを食らわし、すぐに立ち上がった。

佐原は、物足りなさに沙帆子が指を^く咥えなくなるほど、あっさりと部屋から引き上げていった。

2 カメラマン魂

なんかなあ。

湯船に浸かり、風呂のふちに顎を載せながら、沙帆子は心のうちでひとりごちた。

「佐原先生……キスするのかって思ったのに……」

や、やっぱり……あのガキンチョパジャマを目にして、呆れたんじゃないかな？

真っ赤だ……なんて……やたらしみみ口調だったけど……あれって、こいつほんと色気がねえなあなんて、思ったんじゃないじゃ。

沙帆子のパジャマや下着は、みな彼女の好みで選んだものだ。もちろん可愛いのが気に入って買ったのだが、いまは、どれもこれもあり得ないほど子どもっぽく思えてならない。

「わたしってば、少しは大人っぽいを買っとけばよかったのに。下着もピンクのチェックとか、リボン柄とか……あんな幼稚な柄ばっかりじゃなくて……」

唇を尖らせて自分に不平を言ったものの、言ったぶんだけ虚しさに囚われた。

沙帆子は、お泊りのときに母が持たせた、あの行き過ぎたセクシーネグリジェと下着

を思い浮かべた。

ああいうの方が、佐原先生……嬉しいのかな？

思わずそう考えたものの、大胆すぎる考えに頬が熱く燃えた。

でも……やっぱり……そうかも。

先生、さっき、何を考えてわたしの前髪に触れてきたんだろう？

あの眼差しには、どういう気持ちか込められていたのだろうか？

佐原が何を考えているのか、ちっともわからない。

いつか、彼の思いを理解できる 때가来るのだろうか？

沙帆子は風呂の一点をじっと見つめた。

ずっと……

ほんとのほんとに……ずっとずっと、佐原先生と一緒にいられるのかな？

沙帆子は胸に湧いた不安を含んだ疑問を、無理やり心の隅に押しやった。

風呂から上がった沙帆子は、身体を拭き、諦めてリング柄のパジャマを身につけた。ドライヤーで髪を乾かしながら、先ほど目にした風呂上がりの佐原を思い浮かべる。すっごいセクシーだった。前髪にしくがっついて……

沙帆子は自分のリング柄を見下ろし、決意を固めた。

よしつ、明日は学校の帰りに、もっと大人っぽいパジャマを買うことにしよう。佐原先生の好きそうなやつ……

けど、先生の好みって、どんなのさ？

真っ赤なお子ちゃまパジャマを着た姿で、佐原がいるだろう居間に足を向けるのは、実に気後れすることだった。それでも、そのまま自室に引きこもって寝るわけにもゆかない。彼女は自分を叱咤しったしつつ、居間へと戻った。

「沙帆子ってば、遅いわよお」

「沙帆子。ここに」

小言のような母の言葉のあと、佐原が命じるように言った。

お子ちゃまパジャマ姿を、佐原の目に完璧にさらした事実には、彼女は顔を赤らめてもじもじした。

「沙帆子？」

「どうした？ 早く座れ」

幸弘と佐原が同時に言った。

どうやら佐原は、沙帆子が気にするほどには、彼女のお子ちゃまスタイルを気にかけていないようだった。むっとする思いとほっとする思いを抱えつつ、沙帆子は佐原の隣

に座り込んだ。

「えっ？」

佐原の膝の上に置かれているものが目に飛び込んだ途端、沙帆子は驚きの声を上げた。「そ、それ。ど、どうして？」

顔を引きつらせ、沙帆子は父に険しい目を向けた。

佐原が膝に置いているのは、まぎれもなく沙帆子のアルバム……

だが、こいつは、子どもの成長記録というような、ほのぼのとしたアルバムとはわけが違う。

「パバってば、な、なんでいま、これを出してくるのよお」

「なんでもって、啓史君が見せて欲しいって頼むからさ」

にやにやしつつ、幸弘は言う。すこぶるご機嫌な様子だ。

そりゃあそうだろう。このとんでもないアルバムを、自慢の種にしている父なのだ。

「見なくていいっ！」

沙帆子がアルバムに手を伸ばした途端、アルバムが遠くに逃げた。

「先生、見ないで、お願い！」

沙帆子は、両手を必死に合わせて、アルバムを差し上げている佐原に懇願した。

「なんで、見ちゃいけない？」

「な、なんでって。だって、これはですね。……アルバムというようなものじゃなくて……」
佐原は沙帆子の言葉に眉をひそめ、幸弘のほうを見た。

「そうなんですか？」

「そんなことあるもんか。これは沙帆子の成長を詳細に記録したアルバムだよ。沙帆子は、自分のちっこい頃の写真を見られるのが恥ずかしいだけさ」

幸弘は沙帆子の抗議の睨みをすんなりかわし、そのまま佐原に向かって話し続ける。
「啓史君、自慢じゃないがね、僕はカメラマンとしての素質がかなりあると思うんだ。ほら、沙帆子も来たことだし、開いて見てくれ。きっと君も気に入るよ」

自慢じゃないって、しっかり自慢してるくせに……

歯を軋きらせながら、むかつく父に睨みを向けていた沙帆子は、アルバムを開こうとしている佐原に気づき、思わずアルバムに飛びついた。

「や、やっぱ、ダメです！」

「お前な。俺には見せられないってのか？」

佐原の鋭い睨みにびびった沙帆子は、アルバムを掴んでいた手をパツと離して身を引いた。

「そ、そういうんじゃない、な、な、なくてですね」

アルバムは無情にも、沙帆子の目の前で、佐原の手によって開かれた。

沙帆子は思わず呻うめいた。

いつの間に移動したのか、幸弘は佐原の座っているソファの肘掛けに手をつき、愉悦の混じった表情でアルバムを覗き込んでいる。

「これは？」

一番はじめのページには、大きく引き伸ばされた写真がドローンと貼ってある。

普通サイズの写真を想像していたのであろう佐原を、かなり驚かせたようだった。それにしても、この写真……久しぶりに見てしまった。

「この世に、生を受けたばかりの沙帆子だ。といっても、三時間くらい経ってるな。生まれてすぐは、嬉しさに舞い上がっちゃってねえ。カメラのことなんかちっとも頭に浮かばなくて……」

横で説明し続けている幸弘の言葉を聞いているのかいないのか、佐原はじつと写真を見つめている。

まるで、おさるさんのごとき、くしゃくしゃ顔の赤ちゃんだ。

いまとは似ても似つか……

「面影……ありますね」
おもかげ

へっ？

に、似ても似つかぬこの写真の、ど、どこに……わたしの面影があるというのか？

かなりショックだった。同時に腹が立った。
佐原は何を見て、そのおさるのような赤ちゃんが、沙帆子に似ていると言うのだ。
まあ……確かに本人なのだが……

彼女は佐原にうらめしげな目を向けたが、彼は気づきもしない。

「だろ？ 生まれたての沙帆子はね、まじで天使だったよ」

で、天使とな？

沙帆子は、父の言葉にいたたまれず、顔を歪めた。

さすがに天使はないだろ……どう見ても、おさるさん以上じゃないし……

天使とおさるのギャップははなはだしく、猛烈に抗議したい気分が駆られる。

キッチンでカチャカチャ音をさせていた美美子が、トレーにグラスを載せてやってきた。

「はい。啓史君、どうぞ」

美美子はグラスのひとつを、佐原の前に置いた。

「ありがとうございます」

佐原は頭を下げてグラスを手を取った。漂う香りからしてワインのようだ。

美美子は同じものを幸弘に手渡し、沙帆子には可愛いチューリップの絵柄のマグカップを差し出してきた。カップの中身はホットミルクだった。

沙帆子以外の三人は、決まりごとのように、ワインのグラスを軽く差し上げ、それぞれ液体を口に含んだ。お酒の効果なのか、しみじみと満足そうな表情になった三人を目にして、仕方のないことなのに、彼女はやたら疎外感を味わった。

真っ赤なリング柄のパジャマに、ホットミルク。まるきりお子ちゃまだ。

なんだか喉が詰まった。

できることなら、思い切り地団太を踏んで、この憤りを、大人の三人に見せつけてやりたい。

もちろん、そんなことはけしてできないが……

グラスをテーブルに置いた佐原は、またアルバムに目を向けた。

そんな真面目な顔で見ないで欲しいのに……

次のページを開いた佐原の反応は、だいたい予想できるし……

「どう、啓史君。沙帆子、可愛いでしょ？」

「ええ」

どこか上の空で返事をしつつ、佐原はついにアルバムをめくった。

沙帆子は思わず息を止めた。

「これは……すごいな」

佐原の言葉に、沙帆子はぎゅっと目を瞑った。

「だろ。僕は、美味しいシャッターチャンスは、けして逃がさないんだ」

にやにや笑いながら幸弘は胸を張る。

アルバムの最初の数ページは、幸弘の会心の作ともいうべき写真ばかりを選りすぐった、ダイジェスト版になっているのだ。

赤ん坊の沙帆子が、まるで、あかんべえをしているように写っている写真……

ちっこいベビー用の椅子に横向きに座り、ぐうたらな親父のような表情と仕草で、お尻のあたりを掻いているように見える写真……

どれもこれも、そんな感じなのだ。

「幸弘さんの撮る写真って、ほんと、面白いの多いわよね」

「写真は、静と動の混在でなくちゃならないんだよ」

意味がわかるようでわからないことを、得々として語る父に、沙帆子はふてくされた。

「これは、どうしたんですか？」

「ああ。そいつはね。生まれて六ヶ月くらいの頃だ。その頃の沙帆子は、お座りして泣き出すと、足をばたばたさせるんだけど……どうしてなのか、お座りしたままバツクしていくんだ。器用だろ？」

沙帆子は頬を膨らませた。器用と言われても、まったくもって嬉しくない……

佐原の顔に、理解の色が滲み、口元には微かな笑みが浮かんだ。

わたし、佐原先生に、わ、笑われてる……

「そうか。それじゃ、こっちの写真は、座ったままバツクしてて、柱に激突した瞬間ってわけですね？」

わざわざそんな説明を口にした佐原を、沙帆子は拗ねて睨んだ。が、むしゃくしゃすること、まったく気づいてもらえなかった。

「そうなんだよ。そのとき、こーんな大きなたんこぶができちゃってねえ。ほんと、心配させられたよお」

なーにが心配だ！

もう黙っていられない。

「パパ。あとで心配するんじゃないかって、普通は柱に激突する前に、娘を助けるもんじゃないの？」

沙帆子は、父に向けて怒りを飛ばした。なのに幸弘は、平然として娘の激怒を受け流す。

「激突するなんて、その瞬間が訪れるまで思わなかったんだよ。僕だって、柱に激突するとわかっていれば、のほほんとカメラを向けてたりしてないよ。大事な娘の一大事なんだからね」

沙帆子は疑いの目を父に向けた。

「パパを疑うのか？ 沙帆子」

幸弘は、わざとらしさの仄^ほ見える哀しげな顔をして言う。

そんな父を睨みつけ、沙帆子は佐原の手からアルバムを取り上げると、アルバムをめくって記憶にある写真を探した。

「なら、これはどうなの？ 娘の一歳の誕生日だったっていうのに、パパ、このときも助けようとしてもしないで、娘の不幸を、フラインダー越しに眺めてたんじゃない」

一歳の誕生日。もちろん記憶になどないが、この写真がはつきりと事実を物語っている。「沙帆子のためにこのケーキを買ってきたのは、僕だぞ。それもフルーツ大好きな沙帆子のために、わざわざフルーツケーキが美味しいと評判のケーキ屋さんまで出向いていつてだな、買ってきたんだ。そいつをお尻でぺしゃんこにしたのは沙帆子だぞ。このときは、僕のほうこそ、なぐさめて欲しかったよ」

「そうよ、沙帆子。幸弘さん、ほんとにがっかりしてたわよ」

「カメラでずっとシャッターチャンス^{とら}を捉えようとしてたんじゃなきゃ、こんな写真、タイミングよく撮れないと思うけど」

「うーん。そこが、巡り合わせってやつなんだろうなあ」

なぐにが巡り合わせだ。どうやったらこんな、とんでもなく沙帆子のドジっぷりを見せつけるものばかり撮れるのだ。

わたしが取り立ててドジなわけじゃないのに……

幸弘はそういう場面が訪れるのを、カメラを構えてひたすら待っていたとしか思えない。

「いいじゃないか。どれもほのぼのして……お前らしいし……」

お、お前らしい？ 聞き捨てならない佐原の発言に、沙帆子は目を釣り上げた。

「ど、どこですか？ わたしはですね、こんな、こんな、ドジじゃないですよ！」

「……でもこれ、お前だろ？」

冷静な指摘に、沙帆子はぐうの音も出ない。

「合成写真じゃなくて、実際の写真なわけだしな」

佐原の正論に顔を引きつらせたものの、あっさりと引きたくない。

「だ、だから、パパがそういう場面を狙って、故意に撮ってたわけで……特別ドジなわけじゃなくてですね」

「まあまあ、そんなことどうだっていいじゃないの。ちっちゃな沙帆子。どれもひとつ残らず可愛いんだもん」

「ええ。そうですね」

芙美子の声には笑いがあったが、佐原の声にはなかった。

沙帆子はアルバムの写真を見ている佐原の眼差しに、どきんとした。

彼の指先は、ご飯粒をほったにいっぱいいくつつけて、あっけらかんと笑っている幼

い沙帆子の無様な写真に触れていた。

3 ありがた迷惑

「それじゃ、わたしたちはお先に休ませてもらうわね」

アルバムをじっくり眺めている佐原の隣に座り、ホットミルクを口に含んでいた沙帆子は、母の言葉に顔を向けた。

「まあ。そうだな」

妻に立つことを促された幸弘は、しぶしぶといった様子で腰を上げた。

父と母が休むということは、この部屋には沙帆子と佐原だけが残るということ……

いや、それより……佐原はどこで寝るのだ？

その問題は、彼女の知らぬ間に、両親と佐原の間で解決しているというのか？

「啓史君」

心を疑問でいっぱいにして焦っていた沙帆子は、父の声を耳にして視線を佐原に向けた。

父の呼びかけは、アルバムを見続けている佐原の耳には入らなかったようだ。

「啓史君！」

幸弘は一步近づいた上に、先ほどの倍ぐらいの音量で佐原の耳元に向かって呼びかけた。

父ときたら、どうしたのかずいぶん不機嫌そうだ。佐原が呼びかけに気づかなかったくらいのこと、何をそんなにカリカリしているのだ？

佐原は何も言わずにまず顔を上げ、それからおもむろに、「なんですか？」と返事をした。

「わかつてるね」

念を押すように父が言う。幸弘の言葉に、佐原が眉を上げた。

どうも、沙帆子と同じで、彼もなんのことか理解できなかったようだ。

「幸弘さんってば、ほらほら、いらぬ心配しなくていいの」

美美子は、夫の腕を掴んでなだめるように引く張った。

「美美子ちゃん、僕はねえ」

幸弘はそこまで言うのと、言葉を止め、自分に顔を向けている佐原を振り返った。

「僕を怒らせないほうがいいよ、啓史君」

「ええ。わかつてます」

幸弘の視線をまっすぐに受け止め、佐原ははっきりと答えた。

その返事に満足したのか、気難しい顔で大きく頷いてみせると、幸弘は妻に引きずら

れるようにして居間から出ていった。

ばたと閉まったドアを数秒間見つめてから、沙帆子は佐原のほうを向いた。

「先生？」

「なんだ」

すでにアルバムに目を戻していた佐原は、顔も上げずにやたらそっけなく答えた。

ふたりの間に距離を感じ、彼女は戸惑った。

父や母がいたときは、ここまでそっけなくなかったのに……ふたりきりになった途端……どうして？

まるで佐原に嫌われているように感じられて不安が湧き、胸が疼く。

「あ、あの……」

「お前、先に寝てもいいぞ」

さっきと同じくらい……いや、先ほど以上に、その言葉はそっけなく聞こえた。

「でも……」

「明日も学校だし……テストが終わったからって、授業はまだあるんだぞ」

小言のように言う佐原に、沙帆子はむっとした。

「せ、先生だって、学校です」

「俺は慣れてる」

慣れてるって、徹夜がってことだろうか？

「先生……な、なんか……わたしのこと怒ってるんですか？」

佐原はぐっと眉を寄せて、怪訝そうに沙帆子を見た。

寄り添うように座っていたため、上体を屈めてきた佐原の顔が目の前に迫る。

彼女は思わず身体を後ろに引いて、ふたりの間にささやかな距離を開けた。

「なんで？」

「だ、だって……そう思えるから……」

しどろもどろにそう答えたものの、佐原の顔の近さに動揺し、頭からやりとりの内容がぶっ飛んだ。佐原の手が近づいてきた。哀しい習慣から、沙帆子はおでこをピンタされることを予感して身を硬くした。が、ピンタは飛んでこず、その代わりに佐原の手が彼女の額に触れた。

「お前……なんもわかってない」

え？ ……いい、いたい？

「な、何がですか？ それじゃ、説明してください」

「説明するようなことじゃないからな」

会話を無下に遮断されたように思えて、心が震えた。

「い、意味わかんない」

涙目になった沙帆子を見て、佐原が小さなため息をついた。

「ばーか。泣くことじゃないぞ」

佐原は額に触れていた手で、沙帆子の耳たぶをきゅつと摘み、少し乱暴に左右に振った。
「だ、だって……」

佐原の手はそのまま沙帆子の後頭部に回り、彼女の頭を引き寄せる。トクンと心臓が跳ねた瞬間、唇が重なっていた。

キスは沙帆子を翻弄する^{ほんろう}とともに、精神を安らがせた。そっけない言葉や態度とは裏腹に、佐原のキスはとてもやさしい……

甘くやさしい長いキスの果てに唇を離れた佐原は、沙帆子の頭を自分の胸に抱き、少し荒くなった息をなだめるように、大きく息を吸って吐いた。

沙帆子の耳に、佐原の速まった鼓動が聞こえる。

「お前は……」

「は、はい」

「ほんとにわかってない」

「だ、だから……何が……」

「いまはいい」

沙帆子は口を閉じて佐原の言葉の意味を考え、途方に暮れて首を横に振った。

「何がですか？」

「何もかも……」

佐原がまったくわからない。彼女が理解できないことを、佐原は残念に思っているようになのに、言葉にして説明するのを拒んでいる。

どうして？

説明してくれば、きっと理解し合えるのに……そうじゃないのか？

悔しさに唇を噛んで俯いた沙帆子の心情を汲み取っているのか、いないのか、佐原は彼女の背に腕を回し、身体を抱き込むようにしながらアルバムを取り、ふたりの膝の上に置いて開いた。

「先生……」

「見終わるまで黙ってろ」

そっけない言葉に、哀しい気分で頬を膨らませた沙帆子は、アルバムを手のひらで叩いた。

「見終わんなくていいですよ……こんなの、こんなの」

「いいから」

やさしく諭すように言われて、沙帆子はその声の響きに思わず口を閉じた。

佐原は沙帆子の思いも知らず、アルバムを熱心に見ている。

なんだかなあ。

ふたりの想いの重みを計る天秤^{てんびん}は、沙帆子側にガッコンと傾いている。ちよこつとやさしく言われただけで、不服を溶かされてる自分……がっかりだ……

そんな思いを抱きつつも、アルバムの写真を見て時折ページをめくる佐原に、沙帆子は遠慮がちに寄り添い、かなり臆しながら頭を彼の身体に預けた。

なんと言ったのかよくわからなかったが、佐原の声が聞こえた気がした。

沙帆子はゆらゆら揺れる自分の身体を意識した。

身体が浮いてる……？

沙帆子は眠い頭をなんとかはつきりさせながら、^{まぶた}瞼を開こうとあがいた。

「う……ん」

そう眩いた気がしたが、実際、声になっているのかはわからなかった。

身体がすつと落下する感じがし、ぎょつとした途端、軽い衝撃を背中に感じた。

「わわ……」

「起きたのか？ そのまま寝ろ」

起きたのか？ 寝ろ？

言葉が不明瞭に頭の中でこだまする中、何か温かくて柔らかなものが額に触れた。

唇？ ……先生の？

ぼんやりと思索しているうちに、沙帆子の意識は途絶えた。

無意識のうちに寝返りを打った沙帆子は、ふっと眠りから目覚めた。

ここは？

眠気が少し晴れ、沙帆子はうつすらと目を開けた。見慣れた壁が見えた。どうやら自分のベッドに寝ているようだ。

沙帆子はハッとして左右を見回した。

先生？ い、いない！

ベッドは沙帆子ひとりきりだ。

佐原先生……お泊りするんだったよね？

彼女は片肘をついてほんの少し上半身を起こし、ベッドの下に目を向けた。

布団が敷かれている。そして、佐原だろう大きなふくらみがあった。

薄暗くてあまりはつきりとはわからないが、寝ているようだ。

耳を澄ましたけれど、佐原の寝息は聞こえてこなかった。そのとき佐原が寝返りを打ち、彼の顔がこちらに向いた。沙帆子はどきりとして思わず寝たふりをした。

「くそっ」

静かな空間に、佐原の憤りいきどおを含んだ小声が響き、沙帆子の心臓が跳ねた。
な、なんで怒ってるのだ？ それも寝ながら……

続いて、佐原の疲れたような吐息が聞こえた。

眠れないのだろうか？ それで先生、怒ってるの？

眠れないとイライラするものかもしれない。沙帆子はあまり経験がないが……
ならば、話し相手になったほうがいいだろうか？

けど……なんか声をかけづらいかも……

彼女は佐原の様子を窺うかがおうと、ほんのちよつとずつ頭の位置を移動させていった。ベッドの端まで移動して、やっと佐原の様子が見えた。

頭の後ろに両手を当てる、じっと天井を睨にらんでいる。その表情はかなり怖い。

やはり眠れないようだ。不眠症ってやつだろうか？

仕事が忙しすぎて、精神的に参ってるとか？

も、もしかすると、結婚することを後悔してたりするんじゃないか……

結婚するのが嫌になって……でもいまさら断れずに、悩んで眠れないなんてこと、あったり？

あ、あり得るかも……ど、どうしよう……

不安に取りつかれたせいで、喘あえぐような声が、沙帆子の唇から零れ出た。

静かな部屋に、その声はやたら大きく響いた。

「沙帆子？ 起きてるのか？」

返答に困ったものの、寝たふりもできない。

「は、はい。目が覚めちゃって……先生は？ ね、眠れないんですか？」

「……まあな」

ずいぶん間を置いて、佐原が答えた。

「ど、どうして？」

「聞かないほうがいいぞ」

へっ？ 聞かないほうがいい？

それってやつぱり……

沙帆子は、がばっと起き上がった。

「先生、結婚、やつぱり、やめたくなったんですか？」

「はあっ？ なんてそんな考えに飛躍する？」

「だ、だって、眠れないのは悩みがあるからでしょ？」

「悩みはない」

「で、でも……。あ、あの、わたしに何かできることがあれば……そうだ！」

沙帆子はびよこんとベッドから下り、佐原の布団に膝をついて彼の顔を覗き込んだ。眠れないときはお酒を飲むに限ると、以前、父が言っていたことがある。

「お酒持ってきましたか？」

沙帆子は勢い込んで言った。

「ばーか」

「ダ、ダメですか？ そ、それなら……」

「これ以上飲んだら、保証できないぞ」

「保証？ なんのですか？」

次の案を考えていた沙帆子は、上の空で言った。

「それなら、ママがよくやってくれてたやつが いいかも」

「なんだ？」

沙帆子は佐原の身体ににじり寄り、布団の膨らみの胸のあたりと思えるところをぼんぼんとリズムよく叩き始めた。

「おい、いったいなんの真似だ」

「先生、黙って。騙されたと思って目を瞑ってください。こういう風に身体を叩いてもらうと、だんだん眠くなるんですよ」

「俺はな、ガキじゃないぞ」

「ガキとか関係ないですよ。先生、いいから目を瞑って、ぜったい効きますから」

「やってられねえ」

佐原は、呆れ返ったように反対側に寝返りを打った。

どうしようか悩んだものの、怒鳴られもしなかったので、沙帆子はぼんぼんと叩き続けた。

佐原がまったく身動きしないまま、五分ほどが経ち、沙帆子は自分が、こっくりこっくり舟をこいでいるのに気づいた。動いていたはずの手も止まっている。

「せ、先生い？ 寝ましたあー？」

眠たいせいで、ずいぶん間延びした声になった。

佐原の返事はなかった。どうやら寝てしまったようだ。

沙帆子は半開きの目で、思わず会心の笑みを浮かべた。

佐原は馬鹿にしていたが、ちゃんと効き目があったではないか。

彼女はしたり顔で、反対を向いたままの佐原の顔を覗き込んでみた。

目を閉じてる。ちゃんと眠ったみたいだ。

佐原が寝たとわかった途端、沙帆子は大胆な気分になった。彼に対して無意識に持ち続けていた遠慮は、眠たいせいもあって完璧に消え去っていた。沙帆子は佐原の布団に入り込み、彼の背中にびたりと貼りついた。

「佐原先生えゝ、あつたかゝい……先生の匂い……大好きい……」

佐原のぬくもりと彼の匂いは、最高にしあわせな心地を沙帆子に味わせる。そのあと、寝ている佐原に向けて、パジャマの好みを聞いたように思うが、それは夢だったのか、はたまた現実か、定かではなかった。

4 あやふやな記憶

「さーほーこ」

母の声に、トントンと小気味いいノックの音が続き、沙帆子は^{まぶた}瞼を薄く開けた。

「はい」

もう起きる時間？

そういえば、昨夜は寝る前に目覚ましをセットしなかったっけ……

瞼を軽くこすりながらそう考えた沙帆子は、ハツとしてベッドの下に顔を向けた。

ふ、布団がある。空だけ……

やっぱり先生、夕べここに寝たよね？

「ママ、先生は？」

沙帆子は、テーブルの上の時計で、時刻を確かめつつドアのところに立っている母に尋ねた。

いつも起きる時間より、かなり早い。

先生だけ先に学校に行くのかな？ それともいったん家に帰って……

「パパと散歩よ。ほら起きて。お弁当も作らないと、時間なくなるわよ」

えっ！ さ、散歩？ な、なんで？

「パパと？」

「ええ」

美美子は右手を上げて背を向けた。ドアがゆっくりと閉じてゆく。

「ちよ、ちよとママ！」

沙帆子は慌ててベッドから降り、母を追いかけて部屋を飛び出した。

「ど、どういうこと？ なんで先生とパパが散歩なんかに行くの？」

父親は、出勤前の散歩など習慣にしている。

「さあ。そういう気分だったんじゃない」

それってどっちの気分なのだ？

パパでしか、あり得ないか……

「パパ、なんで先生を散歩に……」

「すがすがしい空気の中で、腹を割って話したいことでもあるんじゃない。男同士だし」「腹を割って……パパ、先生にどんな話をする気なの？」

「そんなのわたしに聞いたってわからないわよお、パパじゃないんだから。おかしな子ねえ」

「だ、だって……」

「心配することないわ。互いを知る時間を持つって、大切よ。どちらにとっても」

「そ、そういうもん？」

「ええ。ほら、顔洗って着替えてらっしゃい。三十分前には出ていったから、そろそろ帰るわよ」

三十分も前に出かけたのか……ぜんぜん目が覚めなかった。

昨夜はなかなか眠れないみたいだったのに、先生つてば、ずいぶんと早起きだ。

それにしても、昨夜、眠れない先生を、寝かしつけてあげて……

えっと、それから？

佐原の布団に潜り込んだような記憶がうつすらとあるのだが……あれは夢だったのだろうか？

「お布団畳んで、片付けといてちようだいね。それと、啓史君、今朝は早めに出るって言うってたから、さっさと支度するのよ」

早めに？

「先生だけってこと？」

「あら、あんたも一緒でしょ？ 違うの？」

「さ、さあ……？」

「あんたたちねえ、もう少しコミュニケーション取りなさい」

美美子が呆れ顔で言う。

「だ、だって……」

「まあ、啓史君が戻ったら聞きなさい。ほら、動く」

「はい」

顔を洗った沙帆子は、自分の部屋に戻り、佐原が寝ていたはずの布団を見つめた。

記憶がずいぶんとあやふやだけど……佐原先生、ここに寝てたよね？

顔を洗って頭がすっきりと冴えたことで、逆に昨夜の記憶に現実味がなくなってきた。わたし……先生の布団に潜り込んだりしたかなあ？

でも、今朝はベッドで起きたし……

やっぱりあれは、眠たい頭が作り出した妄想？ 夢を見たとか？

うーん。

腕をがっしり組んで首を捻^{ひね}り、ぐぐつと根性を入れて記憶を探ったが、思い出そうとすればするほど、あやふやになってゆく。

沙帆子は諦めて腕を解き、着替え始めた。

お弁当を作らなきゃならないのに、現実が夢かなんて、考え込んでる場合じゃない。間に合わなくなったら困る。

沙帆子はお子ちゃまパジャマを脱ぎ、制服のブラウスとスカートを着てから、脱ぎ捨てた真つ赤なパジャマを畳^{たた}んだ。

そうだ、学校の帰りに、パジャマ買うんだった。

佐原先生の好みそうなの……って、いったいどんなだろう？

でも、お小遣いの前借りは、これ以上言い出しづらい。いまあるお金、大事に使わなくちゃ。

となると……パジャマ、あんま高いの買えないな。

布団を片付け、通学鞆に今日必要なものを放り込んでいた沙帆子は、ハタと手を止め、机上の一点をじっと見つめた。

そ、そういえばあるじゃん！

お年玉や、祖父母からもらった臨時収入をチビチビと貯め込んだ通帳が……

だが、その通帳は母に預けてある。あれって、も、もらえるかな？

だ、ダメかな？ 学費出してもらうんだし……

……聞いてみようか？

沙帆子は部屋を出て台所に入り、エプロンを身に着けた。

「ママ」

「わたしのほうは終わったわ。これ、使っていいわよ」

父の弁当に入れたおかずのお裾分けの二品を指して言われ、沙帆子は準備していた間い^いを口に出すタイミングを逸^いした。

「あ、ありがとう」

キッチンから出ていく母を、沙帆子はそのまま見送った。

お金のことから……相手が母とはいえ、どうにも切り出しづらい。

お弁当を作っている間に、佐原と父は戻ってきた。食卓にはすでに美美子が用意した朝食が並んでいる。ふたり分のお弁当を手早く包み、沙帆子はみんなと朝ごはんを食べた。

「どうかしたのか？」

えっ？

お金のことを真剣に考えていた沙帆子は、佐原から話しかけられ、慌てて顔を上げた。運転している佐原の目は沙帆子に向いていないが、彼は返事を待っているようだ。

「いえ、な、なんでも」

前を見つめている佐原の顔が、むっとしたようにしかめられた。

「何かあるから考え込んでたんだろ？ 言えよ」

「テ、テストの結果……気になって……」

通帳がどうの、お金がどうのなどと、佐原に言えるはずがなく、沙帆子はそう言葉を濁した。

もちろん、テストの結果は、通帳と同じくらい気になっている。

昨日でようやく試験が終わった。今回は、佐原が勉強を教えてくれることになり、そりゃあもう、嬉しかったのだが……

佐原のカテキヨーは、超スパルタだったのだ。おかげでとんでもなく勉強させられて、頭が過熱しすぎてマジで発火するんじゃないかと思った。

おまけに、俺が教えてやるんだから成績アップは当たり前前、三十番も順位を上げろと命じてきた。とんでもなく無茶な話なのに、それができなかったら、落とし前をつけてもらうとか、わけのわかんないことを言い出して……

「自分なりに手応えはあったんだろ？」

「まあ……どの科目も、思ったよりよかった感じですけど……」

それは確かなのだが……

「結果なんか気に病むな。心配したって意味ないぞ。それに、心配の必要なんてないかもしれないしな」

「そう思ってたて悪かったら、もっと落ち込むことになりますよ」

落とし前のことだつてあるし……

「じゃあ、好きに心配しろ」

むっとした顔で吐き捨てるように佐原は言う。沙帆子は唇を尖らせた。

こういうところ、先生つてば、ほんと短気なんだからあー。

「好きに心配しますっ」

「お前な。あとで覚えてろ！」

「な、なんなんですかあ？ なんで脅すように言うんですかあ」

「俺をむかつかせたからだ」

「そんなの知りませんよっ」

沙帆子は佐原を真似て吐き捨てるように言うと、彼から顔を背け、腹立ちを抱えつつ田舎のどかな風景に目を向けた。前回と同じ道を辿っているようだ。

「わっ！」

頭のとっぺんをがしっと掴まれ、沙帆子は驚きの声を上げた。

「な、何するんですか？」

「沙帆子のくせに、生意気なんだよ」

運転しつつ、片手でぐりぐり頭を押さえつけてくる。

なんなんでもおつ、沙帆子のくせにつてのはあゝ？

「せ、先生、危ないし……や、やめてくださいい！」

彼女の懇願に応じたというより、気が済んだからだろう、佐原は手をひっこめた。

まったく、手が早いんだからあ……

「あゝ、なんか言ったか？」

ぶつぶつと唇を動かしていた沙帆子は、ぎよつとしてぶるぶると首を左右に振った。

「い、言ってます、なんも言ってます」

こ、こりゃあ、困ったかも。いまは運転しなければならぬから、これくらいで済んでいるが、機嫌を損ねたまま車を降りたら、どんな報復を受けるかわかったもんじやない。

「ふーん」

ずいぶんと危険を感じさせる佐原の声だった。

沙帆子はこれ以上の厄災を恐れて、おとなしく口を閉じることにした。

5 知らない自分

車は、見慣れた小道に入った。

すぐに学校長夫妻が以前住んでいた家が見えてきた。学校長の橘広勝たちばなひろかつは佐原の伯父なのだ。

なんだか、この間より、あつという間に着いてしまった感じだ。

車が家の前に停まり、沙帆子は佐原に続いて車を降りた。

家は、第一印象で思い込んでいたほど古くはなかった。庭も綺麗にしているし、ほつたらかしにされているわけじゃないようだ。きっと、部屋の中もほこりをかぶっていたりはしないのだろう。

けど……

「この家、寂しがつてるみたい……」

「面白いこと言うな」

「先生は、そう感じませんか？」

佐原は沙帆子に向けて眉を上げ、それから同意するように頷いた。

「そうかもしれない」

しみじみとした口調で答えながら、佐原は上着のポケットに手をつ突っ込んだ。取り出したのは鍵だった。

「先生、その鍵は？」

佐原は、「このだ」と、家を指す。

学校とこの果樹園の境にある垣根の扉の鍵を持っているのは知っていたが……

「家の鍵も、持ってたんですか？」

「これは借りた」

「借りたんですか？」

「お前が、この中を見たいようだったから……」

どうして？ という問いを、沙帆子の表情から読み取ったらしい佐原がそっけなく言う。

胸がジーンとし、沙帆子はパチパチと瞬きをした。

先生……や、やさしい……

「入らないのか？」

玄関のドアを開け、振り返った佐原が聞いてきた。沙帆子は彼に走り寄った。

「は、入りますっ。もちろん」

玄関に入ると、暖炉付きのリビング兼ダイニングルームになっていた。暖炉の上は吹き抜けになっていて、なんとも凝った造りになっている。板張りの床にほこりは積もっていない。よく磨かれていてピカピカだ。最近、掃除をしたのだろう。

沙帆子は靴を脱ぎ、佐原に続いて部屋真ん中まで歩いて立ち止まった。

学校長の家にあつたのと同じような、凝った暖炉。火が入ったら、ずいぶんと暖かな雰囲気の家になりそうだ。台所には作りつけの食器棚があつて、それなりの数の食器が並んでいる。右側には螺旋の階段……二階には、いくつかのドアが確認できた。

「学校長さんの、今の家に似てますね」

「ああ。この造り、気に入ってたからな」

沙帆子は首を捻った。

「それなら……学校長さんたち、どうして別に家を建てたんですか？ ここにずっと住めばよかったのに……」

この家が、愛する主人に見捨てられたようで、ちよつと可哀相に思える。

「さあ、どうしてかな？ 環境を変えてみたかつたんじゃないか」

居心地のいい家のようなのに……環境を変えたくなるなんてこと、あるのだろうか？

「そういうものですか？」

「いま住んでるところも悪くなかつたろ？ だから、いいんじゃないか？」

沙帆子は一応素直に頷いた。

確かに、学校長の家は、とても素敵だった。

「ことと同じくらい……いや、それ以上に……だろうか？」

「先生、ここに泊まったこと、あるんでしょう？」

「ああ」

佐原の顔に浮かんだ、しあわせを含んだような笑みに、彼女は見惚れた。

家の中を見て回り、十分ほどでふたりは家をあとにした。そして、この間と同じように垣根の扉を開け、校内へと入った。

「まだ時間あるし、俺んところでコーヒー飲んでから行け」

まるで決定事項のように佐原は言う。もちろん嬉しかった。

「はい。それじゃ、お邪魔します」

校舎の裏口のドアを、佐原はポケットから取り出した鍵で開けた。

「先生、この鍵も持ってたんですか？」

そう尋ねた沙帆子に、佐原は鍵を軽く持ち上げ「マスターキー」と答える。

そんなものを持っているとは……

「便利ですね」

感心しつつ言った沙帆子に肩を竦めてみせ、佐原は校舎内へと入った。

廊下は、早朝の冷たい空気の中、静まり返っている。いつもと違う経路を辿り、ドアを開けたら見慣れた廊下だなんて……やっぱり不思議な感じがした。

佐原の部屋のソファに座った沙帆子は、漂い始めたコーヒーの香りを嗅いでリラックスした。

「ほら」

「ありがとうございます」

カップを手渡した佐原は、自分のカップを持ち、いつもと同じように沙帆子の隣に座り込んだ。

ソファにくつろいだ姿勢で座っている佐原をちらちらと見て至福を感じながら、沙帆子は甘いコーヒーをチビチビと啜った。

「今日の昼、来れるか？」

両手で持っていたコーヒーカップから、沙帆子は視線を上げた。

「来ていいんですか？」

自然と嬉しげな笑みが口元に浮かんでしまう。

「ああ。いいさ」

佐原の態度はそっけないが、誘ってもらえてるのだ。

「なら……来ます」

「どうせ来るんなら、お前の弁当、ここに置いてけば？」

「は、はい」

鞆の中からお弁当の包みを取り出し、彼女は手を差し出してくれている佐原に渡した。胸がウキウキと躍った。昼休みに、佐原に会いに来れるのだ。

「ほら、これ」

財布を取り出した佐原が、五千円札を差し出してきた。

「ついであつたかいお茶、買ってきてくれ」

「先生から預かったお金、まだあります」

「いいから持つとけ。金が必要なときは、これ使つていいから」

そんなことできませんと言おうとした沙帆子は、ためらったあげく、何も言わずに口を閉じた。

そんな答えなど望んでいない佐原の思いが伝わってきて、口に出せなかったのだ。

「それと、戻ってきたテストの答案、持つてこいよ。どれだけ成果があつたか楽しみだ」

「は、はい……」

沙帆子はもともと答えた。

やっぱり、どう考えても三十番もアップできたとは思えない。けど、それをクリアし

なければ、落とし前……

前回の試験は五十九番だったから、二十九番以内に入らないとならないわけで……
頬がひくついた。やはり二十九番なんて、とてもじゃないが無理だと思う。

「あ、あの先生？」

沙帆子はコーヒーを飲んでいる佐原に、おずおずと呼びかけた。

「なんだ？」

「お、落とし前のことですけど……三十番はいくらなんでも……あの、あんまりだと思
うんです」

「ふーん、それで？」

「え、えっと。だからですね。せめて、その、じ……」

「じ？」

佐原からじつと見つめられ、沙帆子は言い出そうとしていた言葉を吞んだ。

「に……」

「に？」

な、なんで、わざわざ繰り返すのだ。繰り返されるせいで、言葉にできないではないか。
く、くそお。

「沙帆子、お前なら三十番アップは無理じゃない。俺はそう思ってる」

佐原のその言葉に、沙帆子の憤りはあつけなく消滅した。
「ほ、ほんとに？」

「ああ」

ぞ、そうなのだろうか？ な、なら……もしも万が一、三十番アップのあかつきには？
そういうえば、何も約束してない……

「先生、三十番アップしたら、落とし前じゃなくなるだけなんて、ちょっとおかしくないですかあ？」

「考えてるさ」

「考えてる？ 何をですか？」

「褒美」

「ええっ！ ほ、ほんとに？ほんとにご褒美もらえるんですか？ 先生、何を？」

「それは秘密。まあ、結果待ちだな」

「ご褒美！」

沙帆子のおめでたい頭の中から、落とし前の気がかりはすっかり消え去り、謎の美味
しいご褒美でいっぱいになった。

佐原は、沙帆子の頭を、ほんと手のひらでやさしく叩いてきた。

いつにない、佐原のやさしい仕草に沙帆子はときめいた。

佐原と並んで腰かけて、じんわりと至福を感じながらコーヒを味わい終えた彼女は、
時間を確かめてしぶしぶ腰を上げた。

せっかかない雰囲気だったのに……これで終わらせなきゃなんないなんて……

「……それじゃ、あの、そろそろ行きます」

沙帆子は鞆を持ち、窓に歩み寄って佐原を振り返った。

今日の佐原は機嫌がよいようだし、すんなりと窓を抜け出す手助けをしてくれそうだ。
ほっとしたこと、佐原は沙帆子の背後に歩み寄ってきた。

「ありがとうございます」

沙帆子は嬉しさに顔をゆるませながら礼を言って頭を下げ、窓を開けた。そして、手
助けを予想して脇を開いた。

佐原の両腕が沙帆子の脇に入り込み、彼女はそのまま背後からきつく抱きしめられた。

「せ、先生」

なんの返事もしないまま、佐原は窓を閉め、沙帆子の耳たぶを甘く囁んだ。

「せ、先生……」

沙帆子は予想外の刺激に、身を縮めて余裕なく叫んだ。

佐原の舌が耳の中に進入し、じわじわと舐めてくる。

「ダ、ダメッ！」